1

その男を見たとき、雷（レイ）は目を疑った。十八年間、忘れようとしても忘れられなかったいくつもの顔の中で、特に忘れられないのが、その男の顔だった。

松（スン）……。男の名を雷は口の中でつぶやいた。十八年前はそう名乗っていたが、もちろん本名の筈（はず）はなかった。

一九八九年の六月、雷は北京（ペキン）、天安門（ティエンアンメン）広場にいた。胡耀邦（フーヤオパン）の追悼行事として始まったデモは、やがて民主化要求の巨大な波となって、紫禁城（故宮博物院）の正門前に集結していた。

「天安門事件」と呼ばれる弾圧は、歴史上、二度起きている。一度目の弾圧は一九七六年で、このとき雷はまだ八歳だった。今、雷に横顔を向けてスターバックスのコーヒーカップを手にしている〝松〟も同じくらいだったにちがいない。

周恩来（チョウエンライ）の死去をきっかけに五十万の人民が天安門広場に集結、指導部批判に発展した。政府はこれを解散させるために武装警察を動員し、責任をとる形で、当時の副主席だった鄧小平（ドンシャオピン）は失脚した。これが第一次天安門事件だ。

第二次天安門事件で弾圧と殺戮の指揮をとったのがこの鄧小平だというのは、歴史の皮肉という他ない。しかもこのとき政府は、警察ではなく、軍を投入した。

戦車に圧殺される学生を雷は見た。解放軍兵士は逃げまどう学生に自動小銃を乱射した。何百人もの死体が折り重なり、それを踏み越えるしか、銃弾を逃れる術はなかった。雷もそのひとりだった。きのうまで肩を組み、歌をうたった仲間の血まみれの腹を、胸を、頭を踏んで、殺戮の場から逃れたのだ。

まさか同じ中国人民に向け、解放軍兵士が発砲するとは、学生たちは思っていなかった。

それはもはや虐殺だった。発砲する兵士の中にも涙を流している者はいた。上官の命令とはいえ、同胞を殺すことにためらいを覚えない筈はないのだ。

だがその中にあって、ひとり虐殺の場から安全に逃げおおせた男がいた。

それが〝松〟だ。解放軍の兵士に護衛され、そしてパトカーに乗りこむ姿を雷は見た。虐殺が始まる前なら、逮捕され連行されたのだ、と雷も思っただろう。しかし発砲命令が下ってから、兵士が学生を逮捕する筈はなかった。

だとすればなぜ、〝松〟はパトカーに乗りこんだのか。

答はひとつしかない。人民中国の未来を憂い、ともに集まり、抗議集会の中心で喋っていた〝松〟は、政府がもぐりこませたスパイだったのだ。

その証拠に、集会の中心にいて生きのびた学生も、事件後に次々と公安部や安全部に逮捕された。

雷も当局の追及を免れることができず、四年間の服役と強制労働を命じられた。

そして今、日本にいる。滞在ビザの期限はとうに切れていた。だが吉林省にいる妻と子供のために

も帰るわけにはいかない。拝み倒して日本への渡航費用を借金した親戚にも、顔向けできない。

渡航の手配をした人間の話では、日本は人手不足で、いくらでも仕事が見つかり、しかも給料は中国と比べものにならない高額だということだった。

確かに日本は給料が高い。しかしそれは、食いものも家賃も、すべてが信じられないほど高いからだ。一日十八時間働いても、仕送りはおろか、借金を返すアテすらできないありさまだ。

身も心も疲れきっている。馬か牛のように働かされ、楽しみも夢もない。

そんなとき、仲間からパチンコの〝打ち子〟の誘いがあった。パチンコの〝打ち子〟とは、あらかじめ細工をしてあるパチンコ台で荒稼ぎをし、その金を分ける商売だ。もちろん違法で、つかまれば刑務所に入れられるか、やくざにこっぴどく痛めつけられる、という噂だ。だが背に腹はかえられず、雷は〝打ち子〟の話をうけることにした。

その稼ぎを分配する場に〝松〟がいたのだ。

そこは池袋の繁華街にある公園だった。日本にきて二年半になる雷が、ほとんど足を踏みいれたことのない街だ。

公園のベンチに〝松〟はすわっていた。紺のブレザーを着て、足を組み、紙コップからコーヒーをすすっている。

少し離れた場所に、雷たち四人の〝打ち子〟は集まっていた。それぞれが教えられたパチンコ台で稼いだ金を懐ろにしている。そのうちの四割が〝打ち子〟のとり分で、六割をパチンコ台の裏権利をもつ男に支払うのだ。〝打ち子〟が稼ぐパチンコ台は、こっそりコンピュータのロムをとりかえたものだ。この台の権利が五十万から七十万で売られていて、それを買った人間が〝打ち子〟を雇って稼

がせるのだ。
一台のアガリは五万、まだどれだけ玉がでそうでもそれ以上稼いではならないことになっている。さもないとパチンコ店に怪しまれるからだ。
ロムをとりかえるには、パチンコ屋の従業員を抱きこむ必要がある。だがこの従業員に礼金を払っても、かなり儲けのでる商売だということに雷は気づいた。
ロムをとりかえた台は、おもしろいように玉がでる。五万を稼ぐなどあっというまだ。〝打ち子〟は三軒のパチンコ屋の台を教えられていて、五万稼げば、次の店に移る。三軒で稼いだ十五万のうち六万が〝打ち子〟、九万が裏権利をもつ者のとり分だ。
一日六万の稼ぎは、今までの雷にとっては、とんでもない高額だ。しかし裏権利をもっていれば、さらにその一・五倍が、寝ていても入ってくる勘定だ。
百万払って二台の権利を買っても、二十日もあれば投資は回収できる。その先は儲けばかりだ。二百万あれば四台、五百万あれば十台だ。十台の権利をもっていたら、一日三十万、月に九百万の金が入ってくる。ひと月で借金をすべて返し、ふた月で故郷に家が建つ。
夢のような話だった。五百万などという金とは、一生縁がないだろう。
それにひきかえ、〝松〟は、日本でもいい暮らしをしているように見えた。
公園に面した道に、白いぴかぴかのクラウンが止まっている。〝松〟はその車から降りてきたのだ。新車で買えばもちろん、五百万を下らない高級車だ。
やがて〝打ち子〟の手配師が現われ、雷らからその日のアガリを回収した。この手配師は日本人だった。裏権利をもつ中国人に雇われていて、アガリを回収するだけでなく、〝打ち子〟が約束を破って

五万円以上だしていないかを、各パチンコ店で監視する役目も負っている。
手配師が姿を消し、〝打ち子〟四人は解散した。中には今日の日当でもうひと稼ぎしてやろうという馬鹿もいた。
ロムをとりかえていない台でやったら、一万二万の金など一瞬で呑まれてしまう。なのに今までが大当たりの連続だったので、勝てると錯覚しているのだ。
そんな奴とは別れ、雷は公園をでると、〝松〟に近づいた。二人は少し話して、〝松〟のクラウンに乗りこんだ。雷はあせった。このまま走り去ってしまうのではないかと思ったのだ。
だがそうはならず、クラウンの中で十五分ほど話しただけで、二人は降りてきた。〝松〟はそれからまたベンチにひとりですわった。
二十分後、今度は若い中国人の女が〝松〟に近づいてきた。女がバッグからだした封筒を〝松〟に渡す。〝松〟は中を改め、頷くと、車の鍵を女に渡した。女がクラウンに乗りこみ、どこかに走り去った。
奇妙だった。車は女のもので、〝松〟はここまで運んできただけなのだろうか。封筒にはその謝礼が入っていたのか。
いずれにしても、雷はこのまま〝松〟を見逃すつもりはなかった。
あたりが暗くなる午後六時過ぎ、〝松〟は公園をでて歩きだした。雪はこっそりそのあとを尾けた。色とりどりのネオンが氾濫し、やかましいほどに音楽が鳴り響く、池袋の繁華街を、慣れたようすで〝松〟は歩いていく。金さえあれば、誰でもどんな願いでもかなうのがこの日本だ。金がなければ、

虫ケラ以下だ。なぜなら虫でも、珍しければこの国では金になる。金のない奴には、唾すら吐きかけられない。それをこの二年半、嫌というほど雷は味わった。

飯でも食うつもりなのか。だが〝松〟はどの店にも寄ることなく、池袋駅の西口に入り、東口に向かった。自動券売機で電車の切符を買い、改札口をくぐる。雷も見よう見真似で、切符を買った。

池袋から五つ目の駅で〝松〟は電車を降りた。池袋ほどではないが、にぎやかな街だ。そこから五分ほど歩いたところに建つマンションに〝松〟は入っていった。

エレベータに乗ることなく、階段で三階にあがる。

〝松〟が入った部屋を雷は確認した。表札のでていないドアには「三〇二」という番号が打たれていた。

マンションをでて、これからどうすべきかを歩きながら考えた。ポケットの中には六万円の金がある。雷の住居は、江戸川区のアパートで、二DKの部屋を同じ中国人二人で借りている。

〝松〟をじっくり締めあげてやる。十八年前に仲間を裏切った報いをうけさせるのは、それからでいい。

もし〝松〟がこの日本で金持になっているのなら、命を助けてやるかわりに、パチンコ台の裏権利を買う金を奴からひきだす手もある。

目についた百円ショップに雷はとびこんだ。果物ナイフとガムテープを買った。そして牛丼屋で腹ごしらえし、〝松〟が入っていったマンションに引き返した。

2

ベッドの中で水森が身じろぎをしたので、由紀は目を覚ました。全裸になっても決して外さない腕時計を見る。

午後十時二十分。北京は午後九時二十分だ。何か新しい情報は入っているだろうか。

水森を見やった。来月四十歳になる、警視庁公安部の警部補はぐっすり眠っている。このまま起こさずに帰ろうかとも思ったが、もし寝すごして、終電に遅れたら妻ともめるかもしれない、と思い直す。

別に水森が妻ともめて離婚しようがしまいが、由紀にとってはどうでもいいことだった。月に一度、水森と食事をしてベッドを共にするのは、仕事のようなものだからだ。水森に愛情などない。愛着のようなものなら、少しはあるが。

もし水森が、今の公安部外事二課から別のセクション、たとえば組対部や公安機捜などに移るようなら、二人の関係は終わりを告げるだろう。

由紀はラブホテルのシャワールームに立つと、ざっと体を流した。妊娠しにくい体であると告げているので、いつも水森は避妊しない。水森の放った体液がシャワーとともに太股に流れ落ちる。

バスタオルで体をぬぐいながら鏡を見た。三十三にしては張りのある体だと思っている。時間のある休日にはジムにいき、トレーニングを欠かさない。

Dカップの乳房はまだ垂れていないし、薄い色の乳首も上を向いている。
下着を着け、パンティストッキングをはいたところで水森が起きてきた。
「おいてきぼりか、おい」
「役所をのぞいてから帰ろうと思って」
あきれたように水森は首をふった。
「お前さん、本当に仕事が好きなんだな。そんなのじゃ嫁のもらい手は当分見つからんな」
「結婚する気なんかないわ」
「ふーん」
鏡ごしに由紀の顔を見つめながら、水森は由紀の体を抱いた。硬いものが腰にあたる。
「ずいぶん元気ね」
「お前さんが仕事に戻るというから、俺の息子が邪魔をしたがってる」
「いけない息子さんだこと」
水森の唇が首すじに触れ、由紀は思わず目を閉じた。月に一度、約二十回のセックスで、由紀の弱いところを水森は把握している。
「そういえばな——」
パンティストッキングの上から敏感な部分のふくらみを人さし指で触れ、水森がささやいた。
「一カ月前に埼玉で見つかったバラバラ死体だが、どうも中国人らしい」
体の芯が潤ってくるのを由紀は感じた。
「どうせ不法滞在のマフィアでしょう」

喘ぎを押し殺していった。
「それがどうもちがうらしい。DNA鑑定をしたら、死体が発見される三日前から行方不明になっていたシステムエンジニアだと判明した。勤め先は、六本木ヒルズの外資系だ」
「それがなんでバラバラにされるの」
「そこだよ。ちょいと興味があったんで調べてみたら、その二週間後にも千葉の産廃処理施設で、男のバラバラ死体が見つかってた。身許不明で処理されたんだが、もしかするとこいつも中国人かもしれん」
由紀はくるりと向き直り、水森の首をひきよせた。
「調べてよ」
「管轄がちがうから面倒なんだよ。千葉の奴らは、お前さんと同じで、どうせ不法滞在のマフィアだろうからと、てんでやる気がないんだ。調べるからにはごほうびをもらわないとな」
由紀は笑みを浮かべ、バスルームの脱衣所にひざまずいた。もう一度セックスをする時間がもったいなかった。
十一時には北京からファックスが届く。何か待っている情報があるわけではないが、それに目を通してからでないと家に帰っても眠れない。
猛った水森の力に指をからめた。上目づかいで水森を見上げ、
「口でしてあげる」
というや、喉深く、くわえこんだ。
水森の力が一段と張りを増した。彩りが輝く浅黒い肌の由紀がそうすると、水森は「まるでラテン

系の娼婦にされているみたいだ」と喜ぶのだ。
カのくびれに舌をからめ、ゆっくり顔を前後させた。湿った音が唇の端から洩れる。水森は由紀の喉につき立てるように、腰を反らし、唸り声をたてた。
「たまんないね。おかたい外務省のおねえさんにこんなことされていると思うと――」
由紀は水森を見上げ、一拍おいて、
「いっぱい飲んであげる」
とささやいた。二分もあればいかせられる。スーツを着て表にとびだし、流しのタクシーを拾って霞が関に向かえば、ちょうどファックスが到着する瞬間に間に合うだろう。暗号を変換し、情報官の机におくのは由紀の仕事だ。明朝で充分間に合うのだが、今夜のうちにしなければ気がすまない。
脱衣所とバスルームに湿った音が響き、そのリズムがじょじょに速くなった。
二分とたたないうちに、水森の体が硬直した。口の中にほとばしった命を由紀はそのまま飲み下した。さらに残りを吸いあげ、舌先で力の先端をきれいにぬぐった。
一度口を離し、急速に猛りを失いつつあるそれに、音をたててキスした。
「さっ、これで息子さんもわたしの仕事の邪魔をしないでしょ」
「参った、参った。かんべんして下さい。おねえさんには勝てません」
水森が呻いた。
「じゃ、千葉の件、お願いね」
「わかったよ」
立ちあがり、タオルで口をぬぐうと、紺のパンツスーツを着けた。

「先にでるわ」
ようやくパンツに足を通している水森に告げた。
「ああ。何かでたら連絡する」
「本当よ。お願いね」
由紀は部屋のドアノブに手をかけた。
「なあ――」
水森がいった。ベッドの端にかけ、パンツに靴下を片方はいただけという情けない姿だ。
「なんでそんなに一所懸命なんだ？　俺もお前さんもノンキャリだ。外務省なんて、警察以上にノンキャリは出世できない役所じゃないか」
格好に似合わない問いに、思わず由紀は笑った。
「出世に興味なんかないわ」
「じゃあ尊敬する上司のためか」
由紀は首をふった。
「今の外務省に尊敬できる上司なんてひとりもいない」
「じゃ何だ。まさか中国おたくってわけでもないだろう」
「強いていうなら、情報おたく？　何でも知ってなけりゃ気がすまないのよ」
水森は首をふった。
「わからねえな。世界中のことはおろか、日本中のことだって、全部知るのなんて不可能なのに」
「もうひとつあるわ」

「何だ？」
「教えてあげない」
ウインクし、部屋をでた。笑顔を消し、エレベータに乗りこむと、コンパクトで自分の顔をチェックする。
決して口にしないし、今の外務省では理解されない、仕事にかける自分の情熱のでどころを、鏡に向かってつぶやいた。
愛国心。いってから苦笑する。
ラブホテルのエレベータにこれほどそぐわない言葉はなかった。

3

署長からの呼びだしは突然だった。だが佐江（さえ）は覚悟を決めていた。異動の時期ではないが、新宿署が自分を煙たがっているのは、嫌というほどわかっている。
二〇〇三年の機構改革で、警視庁に、組織犯罪対策部が新設された。これは、旧来の捜査四課と、暴力団対策課、国際捜査課、さらには銃器薬物対策課、公安の外事特捜隊などを合併させて作られた大所帯だ。それに伴い、新宿署にも組織犯罪対策課が設けられ、刑事課四係だった佐江も自動的に所属が組対課となった。
だが名称がかわっただけで、仕事の中身は何ひとつかわらない。

佐江はもう十年以上、新宿署のマル暴担当をつとめているベテランだ。管内のやくざ者に関しては、顔を見るだけでどこに属しているか、シノギは何なのか、伸び筋かそうでないか、がわかる。
これは刑事にとっては必要な情報なのだが、そこまで詳しくなることを、組織である警察は喜ばない。なぜなら、そこまで管内のやくざ者について知識を得るには、当然それなりのつきあいが生じていると考えられるからだ。
つまり癒着だ。
刑事もやくざも同じ人間だ。始終顔をつきあわせ、ときには愚痴をいいあったり、ときには割り勘とはいえ飲食を共にしていれば、情が生まれる。
情が生まれれば、
「お前のところは今キツいんだろ。少しほっといてやるよ」とか、
「あまりやりすぎると、厳しくやんなきゃいけねえから、少しおとなしめにしておけよ」なんてことになる。
これがさらに過ぎれば、刑事の給料では食べられないような飯や、とうてい買えない腕時計とひきかえに、情報をちらちら洩らすことになる。
情報を洩らすのがすべて悪だと、佐江は思わない。小さなネタを提供してやる見返りに、大きなヤマを挙げるネタが戻ってくることがあるからだ。
金やモノをもらうのは問題外だが、ネタをもらうならかまわない。早い話、裏ＤＶＤをさばいているガキを何人挙げようと、組にとっては痛くもかゆくもない。皆、使い捨ての売り子だからだ。
だったらガサ入れのネタとひきかえに、殺しの噂を拾ったほうが気がきいている。

だが困った問題もある。
自分が新宿のマルBのガン首をすべて知っているということは、マルBの側も佐江を知らない者はいない、ということになるからだ。
それを考えると、いつ異動になっても不思議はない。
だから呼びだしをうけたとき、佐江は覚悟を決めた。
本庁組対部か。だったら出世だ。それは自分にはありえない。きたない真似はしていないし、それなりに懸命にやってはきたが、しょせん自分ははみだし者だ。組織の主流にはのれないたちだ、という自覚がある。
どこか田舎の署か、最悪、本庁の内勤、というあたりだろう。だとすればつまらなくはなるが、いくら独り者とはいえ、そろそろマルBの顔も見飽きている。酒びたりの暮らしになるだろうが、それも今は悪くない気がしていた。
ノックをし、署長室に入った。署長とキャリアの副署長、それに見たことのない男が三人いる。このうち二人は、匂いでハム、公安だとわかった。いけ好かないエリート臭がぷんぷんするのだ。もうひとりは、たぶん警察官じゃない。役人にはちがいないが、どこか別の役所だ。
「彼が佐江さんです」
副署長がいった。さん付けするのは、まだ若いからではない。住む世界がちがう、と思っているからだ。二年も新宿署の副署長をつとめれば、次はどこかの県警で警備部長様だ。二度と顔をあわせることもないだろう。
「新宿のマル暴担当では、一番のベテランだね」

おそらくはこれまでの佐江の経歴が記されているらしい書類ホルダーを閉じて、年かさのほうのハムがいった。
「こちらは、本庁刑事総務課の杉課長だ」
署長がいった。おや、と佐江は思った。ハムの匂いがすると思ったのは、自分のまちがいか。すると内勤の異動先は、刑事総務なのだろうか。刑事総務は、指導や庶務などを扱う。だが、新異動先の課長がわざわざ所轄まで会いにくるというのも変だ。
「中国人関係についてはどうですか」
若いハムが訊ね、
「申し遅れました。私、公安部外事二課の一条と申します。時岡さんとは同期でした」
といいそえた。
時岡の名を聞き、佐江の胸にちくりと痛みが走った。あれほど美人で、あれほど不幸な女キャリアはいないだろう。そして西野。狂犬と呼ばれた刑事。
「外二の方が扱う中国人とは別の連中はよく相手にしています。もっとも近頃は、新宿からずいぶん減りました」
佐江はやんわりといった。
「どこへいったと思われます？」
「埼玉、千葉、神奈川。近県で、入管の狩りこみがまだそんなにうるさくないところでしょう。連中は、マルBとちがって、縄張りだの何だの、うるさい仕組がない。やれるところでやる、ただそれだけですよ」

「中国人に対して、どういう感情をもっているかね」
杉が訊ねた。佐江はとまどった。何をいわせたいのだ。
「別に。中国人にもまともなのはいるでしょう。全部が全部、マフィアってわけじゃありません。プロ、セミプロ、アマチュア、いろいろです。アマチュアが食いつめてセミプロになり、一度本国に送り返され、次に日本に戻ってくるときにはプロになっている。そういう意味では、日本が犯罪者を育てている、ともいえます」
「独身だったね」
いきなり質問の矛先がかわった。
「十一年前に離婚している」
「はい」
佐江は頷いた。それについては何もいいたくない。
その場の男たちが顔を見合わせた。
何なのだ、これは、と佐江は思った。どうやら異動を申し渡されるのでないことだけは確かなようだ。
「中国人とマルBの複合犯罪についてどう思う?」
「増える、と思います。シノギがきつくなったり、関西の進出で縄張りが狭まった半端者が中国人と組んだり、場合によっては中国人の下請けをやらされる。中国人には、腕と度胸はあるが情報がない。反対に、そういう半端者は、日本人だけに情報はしこたまもっています。ただ、日本人と組んでる奴らは、それほど難しくない、ともいえます。日本人を挙げれば、つるんだ中国人のことを吐かせられますから」
佐江は答えた。
「では中国人だけの犯罪の場合は? 被害者も加害者も中国人、というケースです」
最後まで黙っていた、警官らしくない男が口を開いた。佐江は男に向き直った。
「こちら、法務省からお見えになった柳原さんだ」
署長が紹介した。
「お手あげです。連中は、どう転んでも警察とはかかわりたくない、と思っている。早い話、マンジユウ(死体)が見つかっても、それが何という名前で、どこからきて、どこに住み、どんな仕事をしていたかすら、つきとめるのは簡単じゃない。渋る口を通訳を使ってやっとこじ開けられた頃には、殺ったほしは、とっくに飛んだあとです」
佐江が答えると、柳原は我が意を得たり、という表情で杉をふりかえった。
「こんなことを私がいうのは釈迦に説法でしょうが、犯罪というのはつまるところ、濃密な人間関係の中で起こるのが大半です。重犯罪ほどその傾向にある。外国人の人間関係を理解するのは容易ではありません。まず言語が異なりますし、喜怒哀楽の表現法もちがう。さらに日常の習慣、金銭感覚、大きなことをいえば死生観すらまるで日本人とちがう。そういう異民族の犯罪に言語すら理解できない捜査員が対処している、というのが現状です。私がいいたいのは単に検挙率が下がるという問題だけではありません。その逆の問題、つまり冤罪や人権の侵害といった事態も起こりうる」
「一番の問題は――」
佐江はいった。全員が佐江を見る。

「あいつら外国人は、それがアマチュアだろうとプロであろうと、役人とかかわりあうのを嫌うってことです。日本人だって役人は好きじゃないだろうが、悪いことをしてなけりゃ、いきなりつかまったり、小突き回されるとは思わない。しかし奴らにとって日本は外国で、その外国の役人は自分に不利なことのできる権力があるというのをわかっている。だから一切、かかわりたくない」

杉と一条が顔を見合わせた。佐江は言葉をつづけた。これがいったい何なのかはわからないが、お偉方が知りたいことを話すだけ話したら、さっさと仕事に戻りたい。どうやらこの連中が聞きたいのは、「現場の言葉」という奴で、それを喋るのに適任だと判断されたから呼びだされたに過ぎないようだ。

「さらにもう一点。こいつが一番厄介なんですがね。少し前なら、街を歩いている中国人や韓国人は、見ればだいたい、そうとわかったものです。もちろん生まれたときから日本にいる人間は別ですが。服装や髪型が何となく野暮ったかったり、妙にキョロキョロしていたものです。それが最近は、まるで見分けがつかなくなっている。ふつうのサラリーマンや学生とかわらないような格好をして、さっさと歩いている。話している言葉を聞けばわかりますが、もしひとりで歩いていたら、まずわからないのが多い。まして問題のある奴ほど、日本人のようなふりをする。ところが連中には、日本人とそうでないのの区別がつくし、お巡りとそうでないのも見分けられる。こうなりゃどうしようもない。遠くから俺たちを見つけたら、こっちの目に入る前にこそっと消えちまう。職質にひっかかるようなのは、たいてい来日して日の浅い、アマかセミプロで、本物のプロは、まず通りを歩いていてひっかけるようなことはできません」

署長室の中は静かになった。やがて一条が訊ねた。

「佐江さんのいわれる本物のプロとは、どんな連中ですか」

「窃盗や強盗の元締め。犯罪者の手配師ですね。あとは殺しを請け負い、それを下にわりふったり、場合によっては自分でも手がける。シノギの種類にもよりますが、五人から十人でグループを作っていて、その下にさらにセミプロやアマの手下を何十人か抱えている。ただそういう手下は、あまり横のつながりもないし、結束もゆるい。プロのグループはちがいます。結束は固いし、仲間を売れば、本人や国許の家族が殺されかねない」

「そういう連中を摘発するのは容易ではない、と？」

「やくざ者もある意味似ていますが、実行犯をパクるのはたいして難しくありません。名前がわかれば、ヤサもシノギも全部わかる。どんなに逃げ回ったところでたかが知れています。海外に飛ぶといったって、せいぜいが、韓国、フィリピン、タイです。それも一生ってわけにはいかない。ところが外国人のプロはちがう。名前がまずわからない。パスポートだって偽造だったらもちろん本名ではないし、ヤサなんかでたらめです。しかも本国に帰っちまえばそれきりだ。こっちじゃ平気で殺しをやるような極悪人が、本国じゃ羽振りのいい、ただの食堂のオヤジだったりする。向こうの警察に、そいつが日本で何をやってたかなんて、つきとめようがない。要するに絶対的に情報が少ないんです。指紋やDNAでも残ってりゃ、そいつがどこの何ベエだろうと、懲役を打てる。でもそれがなかったらお手上げですよ。こんなことはご存知でしょう」

杉が頷いた。

「死体が見つかった。明らかに事件性がある。だが身許がわからない。知っていそうな者も口をつぐむ。しかもすべてが通訳を通しての訊きこみだ。それでは、ほしにたどりつけるわけがない」

「その通りですよ。しかも通訳は慢性的に不足していて、こんなに中国人がいるのにやりたがる者がいない。そりゃそうだ。下手すりゃ通訳本人がビザ切れの不法滞在者だったり、取調の通訳をしている最中に、『よけいなことをいったら、お前のかあちゃん殺すからな』なんて威されても、捜査員にはまるでわからないのですから」

佐江はいい、一同の顔を見渡した。誰も何もいわない。

「じゃ、これで――」

「待って下さい」

副署長がいい、咳ばらいをした。

「本題はこれからなんですよ、佐江さん」

佐江は扉にのばしかけた手を止めた。

「君と同じ問題を、多くの警視庁警察官が感じている。そしてそれを打開する方法は、たぶんひとつしかない」

杉がいい、佐江は興味を惹かれた。

「何ですか」

杉が口を開きかけた。だがそれをさえぎり、一条がいった。

「その前に。佐江さんに担当していただく事案の説明が必要だと思います」

署長を見ている。署長は瞬きし、杉を見た。

杉はわずかに苦い表情を浮かべたが、頷いた。

「そうですな。じゃ、それは一条さんから――」

「待って下さい」

佐江はいった。

「それは俺を、今の仕事から外す、という意味ですか」

「そうです」

副署長が答えた。

「異動ですか」

「厳密にいえばちがいます。佐江さんはこれまで通り、新宿の組対です。ただ、当分、この事案に専念していただきたいということです」

佐江は無言で署長と副署長の顔を見比べた。嫌な予感がした。

「何のヤマです？」

「殺しです」

「ちょうど一カ月前ですが、埼玉県秩父市の山林で、男性のバラバラ死体が発見されました。頭部と四肢を切断されていて、見つかったのは胴体と両足、それに肘の下までの両腕、つまり頭と両手首から先は未発見です」

一条がいった。

「頭部と両手首から先が見つからないのは、別の場所に遺棄したからで、身許をわからなくするのが目的だと思われます。埼玉県警は秩父署に本部をおき、捜査にあたっていましたが、つい先日、死体の身許がＤＮＡの鑑定により確認されました。中国人で洪天浩。港区六本木のコンピュータソフトメーカーにつとめるシステムエンジニアです。年齢は三十九歳。筑波大学に留学、卒業後、就労ビザ

を得て勤務していました。つまり不法滞在者ではありません。洪は独身で、東京港区内のマンションに居住し、交友関係にも問題のある中国人、あるいは日本人の存在は見うけられず、また失踪後、所有していたクレジットカード、キャッシュカード等が使用された形跡もありません」

「死因は何です」

佐江は訊ねた。

「発見された胴体、両足部分には致命傷となるような外傷は見あたりませんでした。解剖の結果、肺などの状態から絞殺の可能性が考えられています」

「頭と手首は見つかっていないのですね」

「そうです。それから二週間たった先月の二十日、今度は千葉県東金市の産廃処理施設で、別の男性死体が発見されました。これも頭部と両手首から先が切断されていて、身許が判明していません。さらに今月に入ってすぐ、新宿区上落合二丁目の路上で盗難届のでていた乗用車を警ら中の戸塚署員が発見し、職務質問をおこなおうとしたところ、運転手が逃亡し、車のトランクから男性の死体が見つかりました。この男性は頭部を鈍器で殴られて死亡しており、身許も判明しています。金正学四十四歳、高田馬場で『金正菜館』という中国料理店を経営しており、交友関係者には暴力団員や不法滞在中国人の名も挙がっています」

その事件なら佐江も覚えていた。管轄がちがうので特に興味を抱くことはなかったが、中国人の飲食店のオーナーの死体が盗難車のトランクに詰めこまれていたのは、いかにもマフィアがらみの犯罪という印象だ。

「金はバラバラではなかったのですか？」

佐江の問いに一条は頷いた。

「どこも切断されてはいませんでした。ただ殺害されていただけです。ではこの三件に共通するものがあるのか」

杉が表紙をめくった書類ホルダーをさしだした。

カラー写真のコピーが三点、印刷されていた。

「三人のマル害に共通するものがあった。左わきの下、腕をもちあげて見なければわからない場所に入っていた刺青だ」

佐江は写真を見た。左腕上膊部の内側と左わきを写したものが三点、並んでいる。

「〇山」

「泰山」

「衡山」

と読める。青いインクで書いたような、稚拙な刺青だった。

「最初の文字が読めないのが、秩父で見つかったシステムエンジニアにあった刺青で、腐敗のせいです。『泰山』が入っていたのが、千葉の身許不明死体。『衡山』が、高田馬場の中国料理店店主です。『泰山』は、タイシャンと読み、『衡山』はヘンシャン。いずれも、中国の道教の聖地、『五岳聖山』の名です」

一条が説明した。

「残りの三つの山は？」

「『嵩山』と書いてソンシャン、『華山』と書くファシャン、『恒山』と書くヘンシャンの三つで、洪

の腕にあったのもそのどれかだと思われます」
「つまりあと二人、殺される、あるいはすでに殺されていると？」
「または残る二人がこの三名を殺害したか」
杉が口を開いた。
「システムエンジニアだった洪と中国料理店オーナーの金のあいだには、表だった交流はまったくなかった。洪の周辺の人間は、金の店の名など聞いたことがない、といっているし、金の店の従業員も、洪を見たことがあるという者はなかった」
「刺青以外の共通点がまるでない、ということですか」
「そうだ。二人は出身地もちがう。洪は北京だし、金は山東省だ。洪は二十六のときに来日し、以来十三年日本にいるが、金は初来日が五年前で、日本語はかたことていどだったらしい」
「その、刺青の山はどこにあるんです？」
「『泰山』は山東省泰安市。『衡山』が湖南省衡山県で、出身地とはちがいます」
一条が答えた。佐江は深々と息を吸いこんだ。ふくらんだ腹がさらにふくらむ。くいこんだベルトを見る一条の目に、わずかだが嫌悪感がこもっていた。
「どう考えても、俺の扱う事案とは思えませんが。マルBがらみの殺しの可能性があるのは金だけで、あとはどちらも各県警の捜一の事案です」
「むろん一課も動いているが、先ほど君がいった通りの理由で手詰まりだ。三人のマル害には、刺青以外の共通点が見つからず、周辺中国人の口も堅い。そこで、警視庁としてある実験を試みることになった」

別の書類ホルダーを杉がさしだし、佐江は受けとった。表紙をめくると、男の写真が貼付されている。
「宋忠民　一九六七年　浙江省杭州　生まれ。一九九七年初来日。現在帰化申請中」
とあった。痩せて、特徴のないのっぺりとした顔立ちをしている。
「二〇〇四年から一年間、神奈川県警察本部の委託をうけ、中国人被疑者取調の通訳をつとめる。二〇〇六年三月より八月まで、警視庁組織犯罪対策部の通訳を通算八回つとめる」
「中国本国における軍歴はなし。またいかなる公的機関に所属した経歴もなし。中国国内での職歴は、学生、日系量販店店員、観光ガイド、など」
「この男が何か？」
他のこまごまとした書きこみは読まず、佐江は訊ねた。
「表向きは特別協力者だが、捜査補助員として試験採用する」
「つまり刑事にする、ということですか」
驚いて佐江はいった。
「刑事ではない。日本国国民でない以上、警察官として採用はできない。身分証も発行できないし、むろん捜査権も逮捕権も、もたない。つまり警視庁の正式な職員ではない。簡単にいえば、アルバイトだ。ただし、捜査に同行し、必要なら通訳、あるいはそれ以上のアドバイスを捜査員におこなう」
「待って下さい。こいつをまさか――」
「君に預ける」
杉が告げた。

「ちょっと待って下さい。なんで俺なんですか。捜一でいいじゃないですか。俺は所轄の一課員なんですよ。そんな俺になぜ中国人の補助員なんてつけるのですか」
ハメられた、と佐江は気づいた。中国人通訳を同行しての捜査など、どんな刑事も嫌がる。足手まといだし、万一、怪我（けが）でもさせたら問題になる。
「君が適任だと判断した」
杉は断定するようにいった。
「君はベテランでマルBの動向にも詳しく、中国人犯罪者を対象にした捜査にも数多くあたっている。この事案がマルB、あるいは中国人犯罪組織に関係したものであっても、適切に対処できるだろう」
「そんな――」
佐江は絶句した。一条がいった。
「時岡警視正の一件のときも、佐江さんは冷静に対処された、と聞いています」
ふざけるな、という言葉を佐江は呑みこんだ。
明らかに厄介ごとを押しつけられている。宋の試験採用は、警視庁本庁ではなく、おそらくは柳原のいる法務省の上から降りてきたアイデアなのだろう。
警視庁はそれを断わりきれなかった。といって、捜査一課で面倒をみるのは困る。捜一はエリート集団で、問題が起きたら対外的にもまずい。そこで、簡単に詰め腹を切らせられる人間を捜し、佐江に白羽の矢が立ったのだ。
佐江が選ばれた理由は明白だ。時岡や西野との一件で〝目をつけられて〟いる。次に何かトラブルを起こせば、クビを飛ばされると、佐江本人も覚悟している。

佐江は無言で署長を見やった。署長は目をそらした。かわりに副署長がいった。
「佐江さんにとっては迷惑な話かもしれません。しかしこれは日本の警察捜査のありかたをかえることになるかもしれない、重要な実験です」
「俺は試験管かビーカーですか」
皮肉をこめて佐江はいった。
「断わりたいといわれるのですか」
副署長の目が冷ややかになった。
「断われるのですか」
「断われない」
杉がいった。
「なぜならこの任務には、ただベテランの捜査員である、というだけでは不足な条件がさらに必要だからだ」
佐江は杉に向き直った。
「何ですか」
ひらき直って訊ねた。
「君は独身だ。この宋とコンビを組んだ者は、行動の大半を共にすることを義務づけられる」
「何ですって？」
「宋という人物に、我々はある疑いを抱いています」
一条がいった。

「彼は以前から進んで警察の捜査活動に協力してきました。初来日の経緯はごくふつうの語学留学なのですが、滞在期間のわりには日本語が堪能で、二〇〇三年に再来日して以降、日本の行政機関の日中の友好活動などにも頻繁に協力している。それでいて、中国大使館関係者などとの接触が不自然に少ない」
「それは中国嫌いの中国人、だからじゃないのですか。日本への帰化申請をしているくらいだ。大使館の役人と仲よくなんかしたくないでしょう」
佐江はいった。一条の目に憐れむような表情が浮かんだ。
「不自然に、と申しあげました。宋は我々に疑われない、模範的な在留中国人を演じている可能性があるのです」
「何のために」
「スパイ活動です。この任務を成功させれば、宋は警視庁と強いコネクションを作りあげることができる」
「つまりこういうことですか。この男は、日本政府に好かれるような中国人のふりをしているが、本当はスパイで、警察の情報を盗もうとしている」
「盗むところまではいかないでしょう。宋が捜査補助をおこなうのは刑事事案で、公安事案ではありませんから」
「どちらでもかまやしません。スパイとわかっているのに、なぜ試験採用なんかするのですか」
「スパイとわかっているからですよ。もし宋を採用しなければ、別の、我々が知らない人間が、それももしかすると中国語の堪能な日本人が、中国側のスパイとして警視庁に入ってくるかもしれない。

それと、試験採用と同時に、宋は行動を著しく制限される。それは身辺警護と警視庁の捜査補助員が、その立場にふさわしくない行動をとるのを防ぐためという理由ですが、何日間かに一日、自由な行動時間を与えられたときに、おそらく接触するであろう中国国家安全部の人間をつきとめるための罠でもあります」
佐江は唖然とした。国家安全部は、中国情報機関だ。対して公安部が、警察に相当する。警視庁の公安部と異なり、刑事・公安両方面の捜査をおこなっている。
「だったらそれこそ公安の人間をつければいいじゃないですか。モチはモチ屋だ」
一条はさらに憐れむように首をふった。
「公安の人間の場合、ミイラとりがミイラになる危険があります。互いに腹の探り合いをしているうちに、知らずに柏手に情報を与えてしまうかもしれない。その点、佐江さんなら安全です」
佐江は息を吐いた。このナメたハムの若造をひっぱたいたら、任務から解放されるだろうか。
されるだろう。クビになるからだ。上は、佐江の気持など露ほども考えていない。嫌なら辞めろ、で片づくのだ。新宿署も警視庁も、佐江を厄介払いできる。
腹の中で怒りがふくれあがった。しかしそれを露わにすれば、こいつらの思うつぼだ。
「もう一度、任務について確認します」
感情を押し殺して佐江はいった。
「私がこの男とタッグを組んだら、二十四時間行動を共にせよ、というわけですね」
「そうだ」
杉が答えた。

「まず最初の二日間、君らは寝食を共にする。そして三日目の半日、君らは各自の行動をとる。三日目の後半から再び二日間、同一行動をとってもらう。これによって宋は、外部との接触を著しく制限され、必然的に三日に一度の自由な時間に、中国国家安全部に連絡をとらざるをえなくなる」
「本人が嫌がったらどうするんです」
「試験採用はなくなる。実際、捜査が始まれば、宋の立場は微妙なものになる。日本警察に協力しているということで、中国人社会から厳しい目を向けられる筈だ。場合によっては、犯罪者グループの攻撃の対象とされかねない。それから守るためにも、君が行動を共にする意味はあるのだ」
柳原が口を開いた。
「国籍法の第五条第一項は、外国人の日本への帰化条件として、『引き続き五年以上日本に住所を有すること』と規定しています。ですが第九条において『日本に特別の功労のある外国人については、法務大臣は、第五条第一項の規定にかかわらず、国会の承認を得て、その帰化を許可することができる』とあります。宋忠民は、おそらくこのあたりを意識しているものと思われます」
「つまり、こちらのいうことに逆らえない、と？」
佐江の言葉に全員が頷いた。
「宋にとっては、この試験採用で結果をだすことが帰化するための重要な条件となります。したがって、彼の正体はさておき、佐江さんの捜査補助には全力を尽すと思われます。それじたいは、警視庁も歓迎すべき行動というわけです」
一条がいった。
「うまくいかなかったらどうします？」

佐江は訊ねた。
「俺とこの宋がべったりくっつき、中国人のワルどもを絞めあげて回っても、何ひとつ殺しに関する情報がつかめなかったら、責任は誰が負うのですか。俺ですか」
「それはない」
ようやく署長がいった。
「君には一切の責任を問わないことを約束する。二十四時間態勢での同一行動というのは、君にとっても苛酷なものだ。それを強いた上に、結果まで求めることはしない」
「ではひとつうかがっていいですか」
佐江は署長の目をとらえ、いった。
「この案件に関して、優先度の高いのはどちらですか。殺しのほしをつきとめることと、中国のスパイ活動を監視することの――」
一条と杉が目を見交した。杉が咳ばらいをしていった。
「君にとっては殺し、外事二課にとってはスパイ活動だ」
佐江はじっと杉の顔を見つめた。
「その言葉を忘れないでおきます。俺は公安捜査には素人だ。宋と行動を共にする以外のことは何もできない。それでいいのですね」
杉は頷いた。
「そのことによって生じた事態の費任は、私がとる」
「承知しました」

佐江はいった。
「この任務を拝命します」
「宋の身辺には注意を払って下さい。くれぐれも、中国マフィアに危害を加えられることがないように。彼は、我々にとっても、使えるカードなのですから」
一条がつけ加えた。佐江はゆっくりと一条に向き直った。
「公安捜査の責任者はあなただと理解していいんですな」
一条はたじろいだような表情になった。
「それは……外事二課全体に……」
「俺は責任者が誰かを知りたいんですよ。刑事捜査に関しては、杉さんが責任者だといわれた。じゃあ公安捜査に関しては誰なんだ」
「それを知るのは必要ですか」
佐江は深々と息を吸いこんだ。
「命を張れ、といったのはあんただ。なのに責任をとる気はない、というのか」
「佐江さん――」
副署長が割って入ろうとした。
「はっきりしてもらいたい、といっているだけですよ。どうも公安の方というのはおつむが良すぎて、いわれることが俺にはよくわからんのです」
一条が激しく瞬きし、いった。
「そういうことなら、私でかまいません。責任は私に」

杉が冷ややかな視線を一条に向けていた。この馬鹿が、という表情を浮かべている。
「了解、しました」
佐江は一条の目をのぞきこみ、答えた。

4

あっというまのできごとだった。弾みとしか、いいようがない。呆然として、雷は足もとに横たわった〝松〟の姿を見おろしていた。その胸の中央、鳩尾にはついさっき買ってきた果物ナイフがつき立っている。
血はほとんどでていない。なのに〝松〟は息をしていなかった。
なぜこんなことになってしまったのだろう。
雷は泣きたくなるのをこらえ、大きく肩で息をした。
〝松〟は、誰かを待っていたようだ。雷がインターホンを押すと、誰何することなく部屋のドアを開けた。中国語で、
「ずいぶん早いじゃないか」
といいながら。
もしかすると女を待っていたのかもしれない。
雷の顔を見て、人ちがいに気づいた。眉をひそめ、無言になった。

「久しぶりだな、〝松〟」
雷がいうと、首をわずかに傾げた。
「忘れてしまったか。無理もないな。十八年も前のことだからな」
雷はいい、うしろ手にドアを閉じた。
「人ちがいだろう。私はあんたを知らない」
「そうかい。あのときあんたは、〝松〟と名乗っていた。忘れちまったか。北京理工大学の学生だといっていた」
〝松〟の表情が険しくなった。
「何の話だ。いったい誰と私をまちがえている」
「誰ともまちがえちゃいない。俺は雷。北京外大の学生で、あんたといっしょに紫禁城前の広場にいた。解放軍の戦車がやってくるまで、な」
「何をいっている。私は北京になんていったことがない。重慶の人間で、学校は高校しかいっていない」
「そうだろう。そうやってごまかすだろうとも思っていた。なぜならお前は安全部か公安部のイヌだったのだからな」
雷はいって、果物ナイフを抜いた。
〝松〟が息を呑んだ。
「俺はだまされないぞ。解放軍の奴らが発砲する直前、お前がパトカーに乗って逃げだすのを見たんだ」

「だから人ちがいだといってるだろう」
「黙れ！」
雷はナイフをつきつけた。
〝松〟は黙った。
「よし、それでいい。別に俺は今さらお前に恨みを晴らそうというのじゃないんだ。あのときは何百人という同志が死んだが、俺たちは皆、若かった。本気で中国という国をかえられると信じていたんだ。共産党の奴らがどれほど冷酷で、人の生命など何とも思っていないかを知らなかった。子供だったんだ。今は再教育されたおかげで、たっぷりわかっている」
「お前が今ナイフをつきつけているのは、その共産党の人間だ。そんな真似をしていると、また刑務所にぶちこまれることになるぞ」
冷ややかに〝松〟がいった。
「おやおや、もう正体を現わしたのか。早いな」
雷は笑った。やはりこの男は政府のイヌだったのだ。
「国家のためにやったことだ。お前たちは中国政府を転覆させようという、外国勢力の陰謀に操られていたんだよ」
「あの日、どこに外国人がいた。いたのは広場の外で、カメラをかついだ連中ばかりだ。俺たちは自分の意思で集まったんだ」
雷はかっときていった。
「それがすでに洗脳されていたのさ」

「そうかい。じゃ、今のお前はなぜ日本にいる？　俺は見ていたんだよ。池袋の公園で、日本人に会ったり、お前が乗ってきたクラウンを若い女にくれてやったりするのをな。お前が真の愛国者なら、いったいこの日本で何をしているというんだ」
「十八年前と同じで、国家の仕事だ。お前のしていることは、国家に対する反逆とかわらない。死刑になってもいいのか」
「ここは日本だぜ。俺が何をいおうと、共産党には罰せられないね」
「一生、日本にいる気なのか。さては滞在期限が切れているのだろう」
図星をさされた。
「やかましい！　お前たち共産党員とちがって、人民はこの国で苦労しているんだよ」
〝松〟は鼻で笑った。
「不良分子が。おおかた、金でもたかるつもりだったのだろうが。帰れ！」
またしても本当のことをいわれ、雷はかっとした。気づくと右手に握ったナイフを〝松〟の胸につき刺していた。
ひゅっと〝松〟の喉が鳴った。大きくみひらいた目で雷を見つめた。唇がわななく。だが、ひと言も言葉を発することなく、その場にくたくたと倒れた。
まるで舞台劇のようだった。〝死ぬ役〟をあてがわれでもしていたように、その場で仰向けになり、動かなくなった。
「〝松〟」
呼びかけたが返事はなかった。わずかに開いた口の上に手をかざした。息をしていない。

ナイフは柄（つか）のところまで〝松〟の鳩尾に刺さり、チェックのシャツがそこだけ濃く色をかえていた。
どうしたらいいのだ。雷はあたりを見回した。どうやら〝松〟はひとり暮らしのようだ。あれだけいい争っていたのに、部屋の奥からは誰もでてこなかった。
だが、「ずいぶん早いじゃないか」といってドアを開けたのを雷は思いだした。友だちか、女が、もうすぐやってくることになっているのだ。
このままここにいたのでは、大変なことになる。日本でも殺人は死刑だ。たとえ死刑にならなくても、長いあいだ刑務所に入れられるだろう。しかも〝松〟は本当に政府の人間だったようだ。刑期を終えて中国に送還されても、自分の人生はそれでおしまいだ。
くるりと踵（きびす）を返し、ドアに向かいかけ、思いだした。ナイフ。ナイフには、雷の指紋がべったりとついている。
恐怖をこらえ、死体の上にかがむとナイフを引き抜いた。その瞬間、ごぼっという音がして、雷は思わずとびのいた。生き返った。
だが、ちがった。空気が入りこんだに過ぎなかった。
ナイフを握りしめたまま、しばらく〝松〟を見つめていた。もし立ちあがってきたら、と思うと、恐しくて背を向けられない。
そのまま後退りした。シャツの裾（すそ）をひっぱりだし、ドアノブをふいて、また〝松〟を見つめた。
何も起こらなかった。〝松〟は横たわったままだ。
ドアを開け、通路にでた。そこから走って階段を駆け降りる。外の通りにでる直前、雷はまだナイフを握りしめたままだったことに気づいた。

5

資料によれば、宋忠民は、練馬区練馬のマンションでひとり暮らしをしていることになっていた。翌日の午前十時、佐江はそのマンションの前に止めた車の中にいた。携帯電話をとりだし、メモしてきた宋の番号を見つめる。

ボタンを押しかけ、やめた。メモを握りつぶす。何と話していいか、思い浮かばない。

警官がやってくることを、どうせ宋はわかっているのだ。礼儀正しく電話をかけてから訪ねて何になる。それどころか、宋が何か、突然佐江にこられてマズいことでもしていてくれたほうがありがたい。しゃぶでも射とうとしているとか。そうなれば、この話はなくなる。

ありえなかった。日本政府におべっかを使って、警察にもぐりこもうとしているスパイなのだ。きっと悪いことは何ひとつ知らない、という顔をするだろう。中国人の悪口をいい、日本人をほめあげて、少しでも佐江に気に入られようとするにちがいない。

そんな奴が、捜査の役になど立つ筈がなかった。通訳を連れて歩く訊きこみなど、聞いたこともない。

たとえ宋が、中国のスパイだろうがそうでなかろうが、佐江にとっては同じだ。

スパイの訓練をうけていたら、多少でも捜査の役に立つだろうか、と昨夜は考えていた。だが訓練をうけたことを認められないのだ。〝ふつうの人間〟のふりを、宋はするしかない。

つきでた腹の前で上着のボタンを留め、佐江は車を降りると、ロビーに足を踏み入れた。

飯はろくに食っていないというのに、酒だけで腹がでっぱってきている。署内の健康診断でも、肝機能の数値がひどく悪い、という警告をされていた。その健康診断だって、課長にさんざんいわれ、四年ぶりにうけたのだ。

だが必要なら、まだ走れるし、そこいらのチンピラなど片手でいなす自信がある。

拳銃は携帯していない。特殊警棒は腰のケースに入っている。いきなり、中国マフィアのアジトに踏みこむようなことにはならないと思ったからだ。

生意気なハムの若造にさんざんいわれていて、万一怪我でも負わせたら、佐江の顔は丸潰れだ。

三階でエレベータを降りると廊下を歩き、ドアをノックした。

返事はない。佐江は舌打ちした。

もう一度ノックをして、ドアノブをつかんだ。

「はい」

内側からドアが開き、わずかに佐江はたじろいだ。痩せて顔色の悪い男が三和土に立っていた。黒っぽいスーツを着て、ネクタイはしていない。

「宋さんか」

写真に比べると痩せていて、冷ややかな雰囲気があった。佐江は身分証を見せた。

「新宿署の佐江だ。今日から俺があんたの面倒をみる」

宋はすぐには答えなかった。瞬きし、佐江を見つめた。

「仕度はできているか。当分、家には帰ってこられないぞ」

果たして日本語が通じているかどうか、不安になった。
「大丈夫です」
宋がいい、ほっとすると同時に、いらだたしくなった。
「ならいい。下に止めた車が心配だから降りて待ってる。交通監視員がうろうろしていやがったからな」
佐江はいうだけいって、くるりと背を向けた。監視員の話は本当だ。宋のマンションが面している目白通りは、駐車違反の重点取締道路だ。乗ってきた車は、新宿署の覆面パトカーではなく、佐江の私物だ。キップを切られたら、罰金は自腹になる。
車に戻り、煙草をくわえた。宋はなかなか降りてこない。いらだって、ハンドルを指で叩く。
十分も経過した頃、ようやく宋がマンションの玄関から現われた。
黒いリュックをひとつもっただけだ。佐江はサイドウィンドウを降ろし、助手席を顎で示した。
宋はおずおずとしたようすで佐江のセダンに乗りこんできた。
「いいのか、荷物はそれだけで。二日は帰ってこられないぞ」
宋はおとなしく頷いた。
「大丈夫です」
佐江は車内で宋に向き直った。
「じゃ、あらためて自己紹介する。俺は新宿署組対課の佐江だ。上の命令であんたと組むことになった。よろしくな」
ぶっきらぼうに告げた。

「宋、です」
宋は言葉短かにいった。それきり無言で前を見つめている。
ひどくおとなしい。もっとおべっかを使ってくるかと思ったが、そんなようすはない。
佐江は息を吐いた。
「あんたに約束してもらわなきゃならんことがいくつかある」
宋は無言のまま首を動かし、佐江を見つめた。
「今日、明日の二日間、あんたと俺は行動を共にする。寝るのも同じところだ。明後日は、半日あんたを自由にしてやる。その間、電話もかけちゃいかん。いいか」
宋はこっくりと頷いた。
「はっきりいうが、あんたが問題を起こすのを、警察の上の連中はひどく心配している。試験採用とはいえ、中国人を、警察の捜査補助員として使うんだ。あんたが何かトラブルを起こして、それが公になれば、俺のクビが飛ぶし、他に困ったことになる人間もでるだろう。だから、上の連中は、俺にあんたとずっといるように命じた。それが嫌ならこの仕事はなしだ。どうする？」
嫌です、やめます、と宋が答えるのを、わずかだが期待していた。だが宋は首をふり、いった。
「大丈夫、です。佐江さんのいう通りでいいです」
佐江は再び息を吐いた。
「これから俺とあんたは訊きこみを始める。あんたの基本的な仕事は通訳だ。俺が中国人にする質問とその返事を、なるべく正確に訳してもらう。もしその中国人が、あんたにしかわからないようなことをいったとしても、それも忠実に訳してくれ」

「はい」
「次にあんた自身のことだ」
宋はわずかに目をみひらき、佐江を見つめた。
「宋忠民というあんたの名前を、俺といっしょの訊きこみで使うわけにはいかない。あんたが東京の中国人社会にどれだけの数、友人がいるかはわからないが、あんたが警察の手助けをしていることをよく思わない中国人もいるだろう。この仕事のあと、あんたがそういう連中に怪我をさせられたりするのを避けるために、人前では別の名で呼ぶことにする。何という名がいい？」
宋は黙りこくっていた。
「俺のいっていること、わかったか？」
「はい。マオと呼んで下さい。毛沢東（もうたくとう）の毛です」
「毛さんか。わかった。これからあんたを毛さんと呼ぶ」
「ありがとうございます」
宋――毛がいったので、佐江は驚いた。
「なぜ礼なんかいう」
「あなたは私のこと心配しています。だから」
「それは、あんたに怪我とかをされると困る人間がいるからだ」
「でも名前がばれて困るのは、仕事が終わったあと。仕事しているときは関係ありません。仕事が終わったあと、私が怪我しても、警察の人は困らない」
その通りだ。偽名を使えというのは、佐江のアイデアだ。一条や杉にいわれたのではない。

おとなしい見かけとは裏腹に頭のきれる男のようだ。
「それに、佐江さんは、本当は私と仕事をするの迷惑。なのにして下さる。ありがとうございます」
「よせよ」
佐江は煙草をくわえた。
「確かに俺は、あんたを押しつけられたが、それはあんたのせいじゃない。俺が転ぶのを待っている奴がいるのさ」
「転ぶ？」
「失敗することだ。俺がドジを踏んだら、大喜びでクビを飛ばす」
毛はじっと佐江を見つめた。
「何か、したのですか」
「そいつはあんたに関係ない。最後の約束だ。万一俺とあんたがいっしょにいるときにトラブルが起こったとする。あんたは何もするな。口をださず、ただ黙っているんだ」
「トラブルとは何ですか」
「つまり、喧嘩（けんか）みたいなことになっても手をだすな、という意味だ。俺が誰かを殴ったり、逆に殴られても、あんたはそこに入ってくるんじゃない。もし俺が袋叩（ふくろだた）きにされ、あんたも危ないと思ったら、俺は『逃げろ』という。そうしたら逃げるんだ」
「わかりました」
佐江は頷いた。素直だ。素直すぎるほどだ。
「携帯電話の電源は切っておけ」

「もう切ってあります」
「よし。じゃあ、いくぞ」
佐江はいって、セダンのエンジンを始動した。

6

「妙な話が聞こえてきた。あんた、何か聞いてないか」
二日ぶりに電話をしてきた水森がいった。
「妙な話って何よ」
由紀は訊ねた。水森は、由紀が省内にいる時間には決して電話をしてこない。だが今日はぎりぎりだった。由紀が霞が関をでたのは午後十時過ぎだった。地下鉄の駅に向かって歩き始め、電話の電源を入れてすぐに鳴ったのだ。
「俺のところの上と法務省の人間が妙にこそこそした動きをしてやがるんだ」
「法務省？　何なの」
「だから例の、埼玉と千葉で見つかったマンジュウの一件だ」
「中国人がからんでるって話？」
「それだ。なんで法務省がでてくるかわからないんだが、捜査の方法についてあれこれやってる節がある」

法務省が捜査の方法について口をだしているのだろうか。警察の上部組織は公安委員会だ。警視庁なら東京都公安委員会だし、警察庁なら国家公安委員会で、法務省は直接の関係はない。
もし口をだしているとすれば、ひどく違法性の高い捜査法などが問題になった場合だろう。事件の実態が明らかではない段階で、口をだすというのは妙だ。
「捜査方法って何よ」
「それがわからねえんだ。うちの管理官で一条てのがいる。もちろんキャリア様だ。そいつが法務省の役人なんかと、例の一件で新宿署に出張っていた」
「新宿署に何があるの」
「誰かを駆りだしたらしい」
「駆りだすってどういうこと」
「新宿署の刑事を、特命でこのヤマの担当にしたってことじゃねえかな」
「待ってよ。公安事案じゃなかったの？　おたくの上が動いてるってのはそういうことでしょ。そこになんで新宿署なんて所轄が関係してくるのよ」
「まるでわからねえ」
水森は吐きだした。
「役に立たないなあ。もっとちゃんと調べてよ」
立ち止まり、あたりを見回して由紀はいった。桜田門（さくらだもん）は目と鼻の先だ。「所轄」だの、「公安事案」だのという言葉を歩いている人間に聞かれたら、それが当のキャリア警官だったなんてことになりかねない。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。